

## 学校現場での相談活動における相談室通信の役割

— 学校臨床実習での活動から —

加山 憂 紀 (愛知教育大学大学院 教育学研究科 学校教育臨床専攻)

手島 啓 互 (愛知教育大学大学院 教育学研究科 学校教育臨床専攻)

廣瀬 幸 市 (愛知教育大学大学院 教育学研究科)

### The Role of Counselor's Letters for Activities in the Scene of School from Activities of Clinical Internship

Yuki KAYAMA (Clinical, Psychological and Practical Studies in School Education,  
Graduate School of Education, Aichi University of Education)

Keigo TESHIMA (Clinical, Psychological and Practical Studies in School Education,  
Graduate School of Education, Aichi University of Education)

Koichi HIROSE (Graduate School of Education, Aichi University of Education)

**要約** 本論文では、学校臨床実習の活動から、筆者らが行ってきた相談室通信の発行について、その役割を検討することを目的とした。筆者らは、X年度の学校臨床実習において、A中学校とB高校でそれぞれ毎月1回相談室通信の発行を行ってきた。活動を通して発行してきた相談室通信の特徴や、実際のエピソードを基にその役割について検討を行った結果、相談室通信の役割4点（「相談室と相談員の存在認知」、「生徒に対する心理啓発」、「教職員との信頼関係構築」、「ニーズを受け止める」）と枠組み2点（「発行時期」、「配布方法」）が抽出された。相談室通信は、枠組み2点を踏まえつつ、役割4点のどこに重心を置くのかを考慮した上で作成されると考えられる。更に、それに対する生徒や教職員からの反応を受けて、その後の相談室通信は作り変えられていくと言えるだろう。

**Keywords** : 相談室通信 役割 中学校 高校

#### I. はじめに

我が国では、いじめの深刻化や不登校児童生徒の増加などを受け、平成7年度から文部省が「スクールカウンセラー活用調査研究委託事業」として、スクールカウンセラーの配置・派遣を始め、現在もスクールカウンセラーの配置に関して国を挙げて取り組んでいる。この「スクールカウンセラー活用調査研究委託事業」が開始した平成7年から平成12年までの6年間の研究成果について、細川・藤原・谷口（2005）は「①子どもに対するカウンセリングによって心理的安定が得られ、不登校状態が改善された、②保護者においても第三者的な存在のスクールカウンセラーが対応することによって安心して悩みを話せ、心理的安定が得られた、またそのことが子どもの心理的安定につながった、③教職員へのコンサルテーションによって子どもへの理解が増し、また対応を一部スクールカウンセラーに担ってもらうことによって教師の心に余裕が生じた、さらに校内研修を通して教育相談への理解が進んだ」とまとめている。こうした成果を受け、平成13年度には全国の中学校に計画的に配置することが目標とされ、平成18年度には全国の中学校7,692校にまで配置が進み、中学校のみではなく、小学校（1,697

校）や高等学校（769校）にも派遣がなされた。このようにスクールカウンセラーは、学校現場において求められる存在となっていると言えるだろう。

そこで、学校現場においてスクールカウンセラーが担う役割について、文部科学省(2007b)は、「①児童生徒に対する相談・助言、②保護者や教職員に対する相談（カウンセリング、コンサルテーション）、③校内会議等への参加、④教職員や児童生徒への研修や講話、⑤相談者への心理的な見立てや対応、⑥ストレスチェックやストレスマネジメント等の予防的対応、⑦事件・事故等の緊急対応における被害児童生徒の心のケア」としている。

平成19年に文部科学省(2007a)によって行われた第2回教育相談等に関する調査協力者会議において、「学校に所属するあらゆる人がスクールカウンセリングの対象」であり、「スクールカウンセラーは全校生徒に認知されている必要がある」と述べられている。また、その認知を得るためには、必ずしも行うべきではないが、「「カウンセラー通信」などの印刷物を全校生徒に配布するのよい方法である」とされている。徳田（2007）は、SCの広報作りの具体的なポイントとして「①絵やひらがなが多い親しみやすい紙面

にする, ②読み手の心が少し動くことを目標とする, ③ぱっとみても伝わるような短くてインパクトの強い見出しの言葉を吟味する」ことを挙げている。

このように, スクールカウンセラーが学校現場で求められ, 存在認知が重要であるとされてはいるが, その存在認知のための広報活動に関する研究はあまり見られない。よって, 本研究では, スクールカウンセラーの広報活動である「相談室通信」の持つ役割について検討を行う。

## II. 学校臨床実習について

本研究において考察したものは, 愛知教育大学大学院教育学研究科学校教育臨床専攻臨床心理学コースのカリキュラムの中にある学校臨床実習で行ったものである。本コースは日本臨床心理士資格認定協会により, 臨床心理士養成に関する大学院として第一種指定大学院に認定されている。本コースで開講されている「学校臨床実習」では, 大学院生が「アイリスパートナー」という名称で実際に国公立の小中高校に赴いて実習を行っている。日本のスクールカウンセラーの養成についての問題点として, 高岡 (1998) はスクールカウンセラーが「学校における職場経験が少ないため, 学校の教育や臨床活動について十分理解しているとは言い難い」ということを挙げている。そのような指摘がある中で, 本実習は学校現場がどのようなところであるのか知ること, 児童・生徒がどのように過ごしているのかを知ること, スクールカウンセラーのための専門知識や技術というものよりも, 学校で心理職が動く感覚を身に付けることを目的として掲げている。

筆者らはX年度, 上記実習において, A中学校とB高校にアイリスパートナーとして携わった。その活動の1つとして毎月, 生徒向けに相談室通信を発行していた。各学校の特徴についてはそれぞれ以下のとおりである。

### ・各学校の特徴

#### － A 中学校の概要と特徴－

生徒数は約500名である。半数以上の生徒が同地区のC小学校から入学しており, C小学校以外からの入学者は少ない。アイリスパートナーの受け入れはX年で6年目である。この学校では, 生徒の自主性を重んじている雰囲気があり, 生徒自身で企画・運営する行事も多い。また, 生徒が一人一人研究テーマを持っており, 各自で調べ学習を行っているなど, 勉強意欲が高い印象であった。

#### － B 高校の概要と特徴－

生徒数は約600名である。進学校として学業に力を入れた校風であり, 勉強熱心な生徒が多い印象をうけた。また, 教育実習生の受け入れや, 教育研究発表なども積極的に行っている学校である。そのため, 生徒

はアイリスパートナーが校内を巡回していても, 対応に慣れているようであった。

## III. 相談室通信の概要

### － A 中学校の相談室通信－

発行時期: X年5月～X+1年3月 (計10枚)

用紙: A4用紙カラー印刷1枚

配布方法: 生徒及び教職員全員に配布

相談室通信の内容として記載したものは, 心理学の小話とアイリスパートナーが来校する日時である。心理学の小話については, 心理学全般に興味を持ってもらうために, 認知心理学や社会心理学など分野を固定することなく幅広い範囲を扱った。また, 文章も日常のできごとから心理学の話につなげるという構成にし, 中学生が親しみやすいような文体やイラストを用いた。ただ, 配布している中で, 「親が楽しみにしている」という生徒からのフィードバックがあった。そのフィードバックから, 生徒全員に配布する場合は保護者が読むことができるという視点が得られたため, 親しみやすいが要点を絞める文体にすることで, 中学生向けではあるが保護者が読んでも楽しめるような内容を心掛けた。

### － B 高校の相談室通信－

発行時期: X年7月～X+1年3月 (計8枚)

用紙: A4用紙カラー印刷1枚

配布方法: 各クラスに掲示

B高校では, 例年相談室活動の一貫で相談室通信を発行していたが, X年度は高校側から相談室通信のデザインやテーマに関して, 「より高校生に向けた内容を意識してほしい」との意向を伝えられた。また, 学業に力を入れた校風であり, 勉強熱心な生徒が多い印象から, 相談室通信を作成するに当たって次の点に配慮した。まず, 高校側の意向に沿って, 装飾や色味は控えめなデザインを心掛けた。また, 高校側のニーズに応える形で, 文章を多く掲載し, 思春期・青年期のテーマである自己に目を向けるきっかけとなるような話題を取り扱った。さらに, 学校行事などにも絡めた内容を掲載した。クラス掲示という配布方法を取ったため, 生徒の目に留まりやすいような図やイラストを加えるなど, 視覚に働きかけるようなアプローチを行った。

## IV. 相談室通信の作成

A中学校における相談室通信の発行月ごとのテーマ (表1) 及び実際に発行された相談室通信 (資料1) と, B高校における相談室通信の発行月ごとのテーマ (表2) 及び実際に発行された相談室通信 (資料2) を示す。

表1 A中学校において発行された相談室通信の各月の内容。

5月	アイリスパートナーの自己紹介
6月	カクテル・パーティー効果
7月	グラウンディング
9月	バーナム効果
10月	カリギュラ効果
11月	短期記憶
12月	長期記憶
1月	音楽によるリラクゼーション
2月	プルースト効果
3月	高原現象

表2 B高校において発行された相談室通信の各月の内容。

7月	アイリスパートナーの自己紹介
9月	単純接触効果
10月	短期記憶と長期記憶
11月	自己効力感（セルフ・エフィカシー）
12月	漸進的筋弛緩法
1月	メタ認知
2月	アイデンティティ
3月	防衛機制

A中学校では、5月から相談室通信を発行している。初月である5月は、アイリスパートナーを全校生徒に認知してもらえよう、自己紹介と自身の写真を記載した。また、次月（6月）から心理学の小話を書くことにしていたが、初めは中学生にとって身近で興味を持ちやすいものとして、カクテル・パーティー効果を取り上げた。

その後、アイリスパートナーの認知も上がり、アイリスパートナー自身も学校での動きに慣れてきた頃には、生徒がどのような状況にあるのか、どのような学校行事があるのかということを入念に入れながら、作成した。特に11月は期末テストが迫っており、3年生にとっては非常に重要なテストであることから、勉強に活かすことのできるような記憶法について取り上げた。それだけでなく、年明けの1月には息抜きの方法としてリラクゼーションを取り上げるなど、学校行事に合わせすぎることではなく、関連していると思われるような心理教育や心理的支援を含む内容も取り扱った。

なお、発行するにあたり、A中学校でアイリスパートナーの担当をしている教員と、教頭に内容を確認してもらい、指導を受けた。それを基に内容を修正した後、アイリスパートナー自身が印刷、配布をした。その確認の際や、配布後に教職員と内容について話す機会が多く、「子どもはこの効果についてどのように捉えるだろうか」「このリラクゼーションは教員にとっても使えると思う」などの質問や感想を頂いた。そのため、教職員とのこのようなやりとりを意識しながら、

相談室通信の作成にあたるようになった。その結果、教職員との間で、信頼感を構築していくことが可能になったと考えられる。

B高校では、7月から相談室通信を発行している。活動が始まってすぐの7月にはアイリスパートナーの存在認知を目指して、アイリスパートナーがどのような存在であるかの説明と自己紹介を行った。中間試験の時期である10月には、効率的に勉強をするために使える知識として短期記憶と長期記憶の話題を取り上げた。また、11月には、試験の結果を受け、落ち込んでいる生徒の姿を見かけることも多くあったため、自己効力感（セルフ・エフィカシー）をテーマに扱った。その際には、生徒から「前回のテーマはすごく良かった」「読んでいてなるほどなって思った」という反応が得られたこともあった。大学入試センター試験が近づき、校内の緊張感が高まっていた12月には、リラクゼーションとして漸進的筋弛緩法の話を取り上げた。アイリスパートナーの実習が終了する3月には、アイリスパートナーから生徒に伝えたいこととして、自分の心と上手く付き合うことをテーマに防衛機制について取り上げた。

さらに、クラス掲示でも生徒の目に留まるように視覚に働きかけたアプローチの結果、図やイラストが目につきやすいことで「ふとした時に眺めることが出来る」という生徒からの意見が得られた。

なお、発行するにあたり、B高校のアイリスパートナー担当の教員と大学の実習担当教員から内容に関する指導を受け、高校のアイリスパートナー担当教員に印刷・掲示を依頼した。そのため、相談室通信の内容に関して事前に十分な検討が行われたことで、学校側のニーズに応えた形での相談室通信の発行を行うことができたため、教職員からの肯定的な活動認知に繋がったと考えられる。

A中学校、B高校の両校において共通していたのは、発行の時期や配布方法に合わせて相談室通信のテーマを決定していた点である。また、相談室通信を作成し続けている中でどのようなテーマを用いるのか決めかねることが何度かあった。その際には、アイリスパートナー同士でどのようなテーマを取り上げているのか情報を共有しあうことで、より適当な内容を検討することができるようになったと考えられる。

## V. 検討方法

以上のように記した相談室通信の特徴や実際のエピソードから、それぞれが相談室通信を作成するにおいて、重要であると感じたことを書き出し、KJ法を参考にして分類を行った。そして、その分類の図式化については、グラウンデッド・セオリー・アプローチ（GTA）を参考にした。



## VI. 結果と考察

4点の役割と2点の枠組みが抽出された。これらのことについて考察する。

まず、役割について記述する(図1)。1点目は学校全体に対する「相談室と相談員の存在認知」の役割である。2点目は「生徒に対する心理啓発」の役割である。3点目は「教職員との信頼関係構築」の役割である。4点目は生徒や教職員の「ニーズを受け止める」役割である。

両校で相談室通信を発行する際に当初考えていたことは、「相談室や相談員の存在認知」であった。アイリスパートナーとしての実習が始まった月には自己紹介を行い、相談員や相談室についての情報を載せた。次の月からは、相談室通信を生徒に読んでほしいという思いから、文章やレイアウトの工夫などを行い、当該の生徒たちが関心を持ちそうな身近なテーマを取り上げることで、生徒たちに相談室通信を読んでもらおうと考えた。このような存在認知については、上記の時期が過ぎた後も、相談室や相談員を必要とする生徒が気軽に相談室を利用できるよう、毎月の相談室通信に来校時間と相談室の場所を明記するという形で力を入れた。それだけでなく、アイリスパートナーが学内で行うワークショップの活動に関する情報を載せるなどの案内にも利用した。

ただ、相談員のスタンスは、特定の生徒が相談室に来談できるよう繋げるだけでなく、多くの生徒が自分自身で心の健康を維持できるようになってほしいというものだった。これは、石隈・水野(2009)の提唱する3段階の心理教育的援助サービスの中で、全ての子どもたちに対する援助のことを示す一次的援助サービスに該当すると考えられる。一時的援助サービスでは一般生徒に対する予防的な関わりが重要とされている。そのため、ある特定の生徒だけでなく、一般生徒も関心を持てるような心理教育・心理支援的な内容を取り上げることによって、「生徒に対する心理啓発」的な役割を持たせた。その際には、生徒がどのような発達段階にあるのかということを考えることが必要になってくる。そのため、日々の実習の中で生徒の発達段階を見極め、その段階に応じた内容を取り上げるように心がけた。また、以前に発行した相談室通信や実施したワークショップの内容から繋げたテーマを選択することで、生徒たちのより理解が深まり、日常生活に活かすことができるようになるのではないだろうか。

また相談室通信は生徒向けに作成してはいるものの、学校という場であるため教職員の目にも触れることになる。その時に、どのようなテーマを扱っているのか、それは生徒の発達段階相応のものであるのかということも検討することになる。相談員は毎日学校で

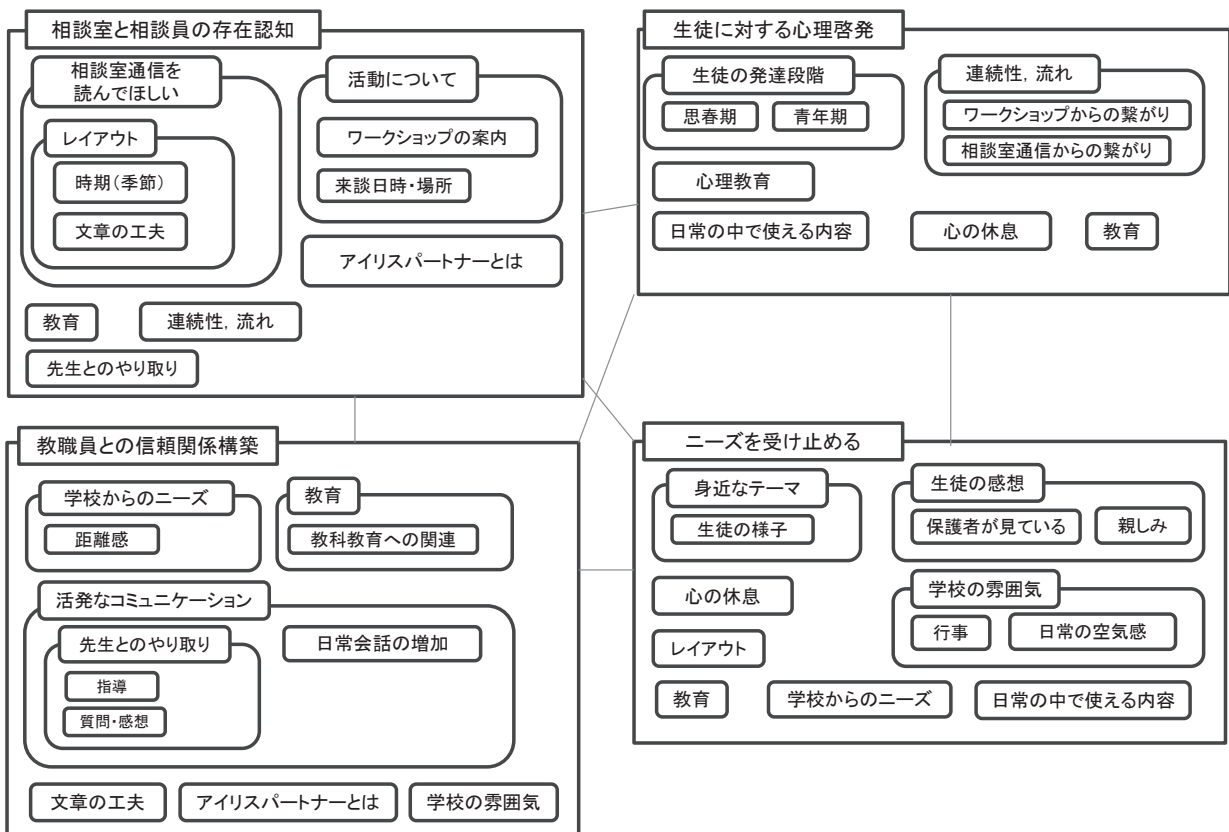


図1 相談室通信の役割における要素。

生徒と関わっているわけではないため、生徒の現状について上手く把握できないことも多いだろう。そこで、毎日生徒と関わっている教職員と内容について検討することにより、より生徒の状況に即したものができあがると考えられる。そして、そのように相談室通信を介した教職員との交流が増えると、自然と日常的な会話も増加するだろう。また、選んだテーマに一部教科教育的な内容を入れることで、コミュニケーションが広がることも考えられる。このことは、互いの仕事や専門性を知ることにも繋がるため、「教職員との信頼関係構築」の一助にもなってくるだろう。

また、忘れてはならないことは、相談室通信は相談員から生徒や教職員へ向けた一方的なものではないということである。実際に、先述のように生徒や教職員から通信の内容について質問や感想が投げかけられることもある。また、相談員が学校現場で過ごしている中で、行事に合わせることや学校の雰囲気を感じること、学校の様子や生徒の状況から、「今、ここ」で必要だと思われるテーマを見つけ出し、それを次月以降の相談室通信で活かすこともある。つまり、相談室通信は相談員の活動の中で感じたニーズを「受け止める」役割をも担っていると言える。

このような関わりを、相談室通信を通して行くことで、相談員と生徒や教職員との間の信頼関係は

更に強化されるのではないだろうか。そして、その関係を踏まえた上で更に次回以降の相談室通信の内容を考えることができるようになるだろう。そのように考えると、今回作成された相談室通信においては、これら4つの役割は独立したものではなく、役割同士が相互に関連しつつ同時に含まれるものであった。また、相談室通信作成にあたり、どの役割に重点を置いたものにするかという役割の重心は、状況に応じて変化していたと考えられる。

上記のように4つの役割が示されたが、発行する際には発行の枠組みが関係してくる。主な枠組みとしては発行時期と配布方法がある。発行時期について考えると、発行にあたり、学校行事という時期を考慮することは、生徒が相談室に関心を持つきっかけ作りのためには必要となる。しかし、相談員が学校の生徒や教職員に十分に認知されていない状況では、まず存在を認知してもらうことが優先と考えられるため、生徒や教職員と相談員の関係性がどのような状態まで構築されているかを考慮する必要があるだろう。また、配布方法について考えると、全校生徒に配布する場合には、相談員の認知が広がりやすいという特徴だけでなく、保護者の目にも触れることを意識した相談室通信の作成が必要となってくる。そのため、保護者が見ても楽しめるような文体にするなど工夫が必要となるだ

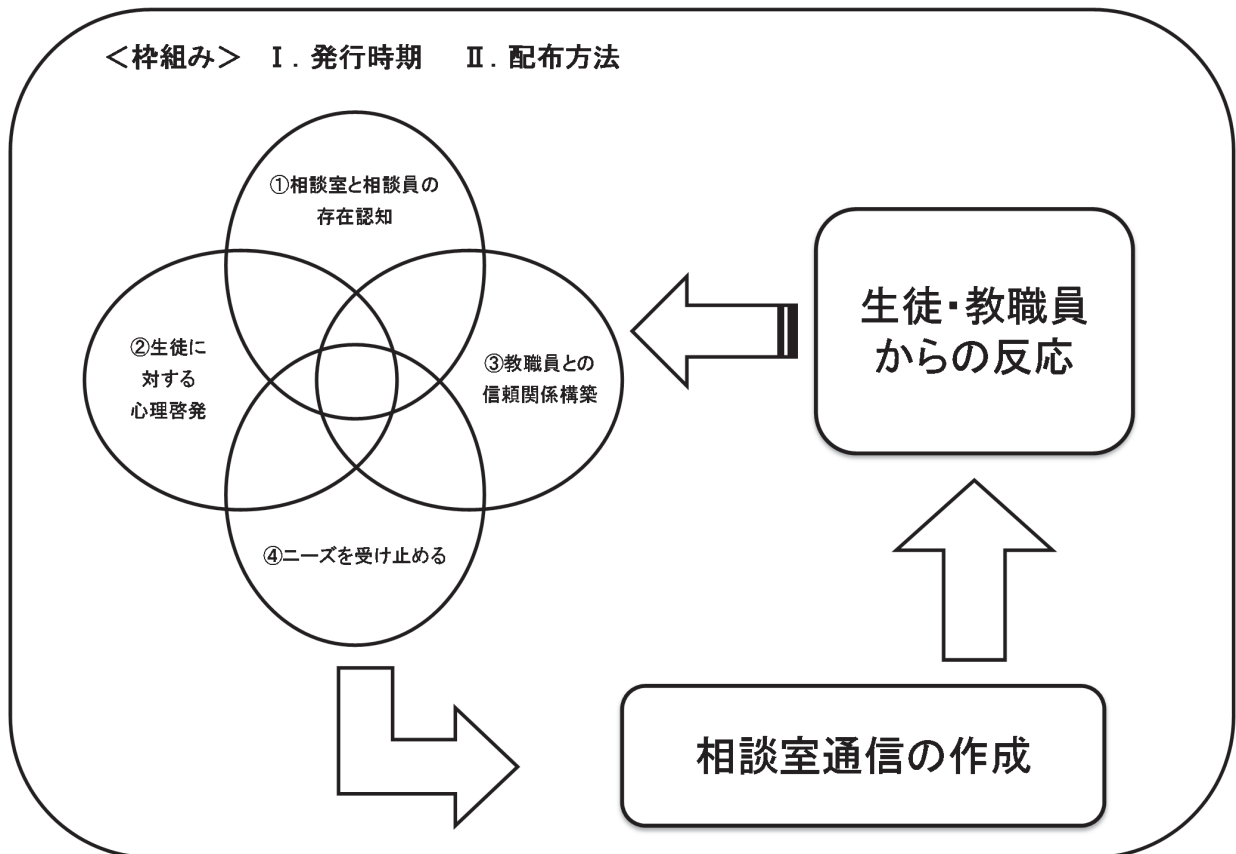


図2 相談室通信の作成モデル。

ろう。一方, クラス掲示の場合には, 必ずしも生徒全員の目に触れるわけではないため, 掲示場所や視覚的なアプローチなどの工夫が必要となるだろう。しかし, 次の発行まで掲示され続けるため, 生徒の日常に馴染みやすく, より生徒に向けた内容で発行が行えると考えられる。

以上のような枠組みを踏まえつつ, 4つの役割のどこに重心を置くのかを考慮した上で相談室通信は作成されると考えられる。更に, それに対する生徒や教職員からの反応を受けて, その後の相談室通信は作り変えられていくのではないだろうか(図2)。ただ, 相談員が1人で作成している場合, 他の業務もあり多忙であるため, 毎回新たなテーマを用いつつコンスタントに発行を続けることは困難であるだろう。そのため, 相談員同士で相談室通信について意見交換をする場を設けるなど, より良い相談室通信作成のために, 相談員と教職員との協同だけでなく, 別の学校で活動している相談員間の協同をもできる体制があると良いのではないだろうか。

今回抽出された役割や枠組みは, あくまで一部のものであり, 全ての役割や枠組みを網羅しているとは言い難い。特に今回は2校のみの検討であるため, 他の学校の文化下では相談室通信が異なった役割を果たすことも考えられる。そのため, 今後は対象校を増やしていくことで, 新たな役割などが抽出されるか, それとも同じ役割が導きだされるのか検討する必要があるだろう。

## 文献

- 細川廣・藤原一夫・谷口清(編著)(2005): スクールカウンセラー活用マニュアル コレール社
- 石隈利紀(監)水野治久(編)(2009): 学校での効果的な援助をめざして 学校心理学の最前線 ナカニシヤ出版
- 文部科学省(2007a): 第2回教育相談等に関する調査協力者会議,  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/seitoshidou/kyouiku/shiryo/07103011.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/kyouiku/shiryo/07103011.htm) (2014年11月22日取得)
- 文部科学省(2007b): 児童生徒の教育相談の充実について 一生き生きとした子どもを育てる相談体制づくり—(報告),  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/seitoshidou/kyouiku/houkoku/07082308.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/kyouiku/houkoku/07082308.htm) (2014年11月22日取得)
- 高岡文子(1998): 日本におけるスクールカウンセラーの養成に関する一考察—米国大学院におけるスクールカウンセラー養成プログラム経験をもとに—, 東京大学大学院教育学研究科紀要, 38, 327-336

徳田仁子(2007): SCの広報活動として 村上正治(編)学校臨床のヒント SCのための73のキーワード 金剛出版

## 付記

本研究は, 日本心理臨床学会第33回大会で発表されたものを加筆, 修正して作成したものである。学校臨床実習の活動を快く受け入れてくださった, A中学校ならびにB高校の教職員の皆様に深く感謝申し上げます。

